

農村地域にみられるコミュニティ活動と町におけるコミュニティ活動

私が前に住んでいた所は、農村地域で冠婚葬祭を例に挙げると、隣保班で葬式ができると、一戸2名が3日間手伝いに出なくてはなりませんでした。善し悪しきも、昔からの風習で、目上の人指図に従って仕事をし、新しく入ってきた住人にとっては、その場が、地域社会へのデビューになったのだと思います。3日間の集団活動の中で、普段交流の無い人達が、互いに知り合い、縦横のつながりを持てるようになり、そこで地域住民としての意識が芽生えてきたのです。

地域の学校とのつながりでは、PTA活動の構成員が、正会員と賛助会員から成り、正会員とは、学校に通っている子供のいる家庭、賛助会員とは、学校に通っている子供がいない家庭、強制ではないが、賛同してくれる家庭がほとんどでした。そうすると、PTAが発行する機関紙が、賛助会員にも配られたり、学校祭のバザー出品に協力してくれたり、自然に地域住民全体が学校行事へも参加協力してくれて、隣り近所の顔が見える関係ができていました。

そのときには、気付きませんでした。人に対して関心を持ち、関わりを持つこと、地域に対して関心を持ち、関わりを持つことが、その地域に溶け込めることだと思いました。

町の中ではというと、私が今住んでいる所では、隣り近所が、全てここ1~2年のうちに、移り住んできた新住人ばかりなので、普段は何の関わりもなく、煩わしさは無いものの、交流の機会もないので、隣り近所はいても、孤立している寂しさを感じます。今は、朝の挨拶に心がけ、登校する近所の子供たちが、挨拶を返してくれようになったことにも、うれしさを感じる今日このごろです。

一日も早く地域の人と、顔の見えるお付き合いができるようになる為に、地域との関わり、近所の人との関わりに、努力していきたいと思っています。